

東区、よかまち・よかところ **歩・歩・歩**

東区歴史街道を往く



(坂本恒義氏作)

Vol. **3**

歴史

歩・歩・歩
さんぽ

東区歴史ガイドボランティア（さんぽ会）の おすすめスポット Vol.3



目次

エリア	掲載月	タイトル	ページ
志賀島	25年5月	神と生きる島～志賀海神社	4
下和白	6月	和白・相ノ浦「神功皇后御繫船」	5
馬出	7月	旧福岡市動物園	6
香椎宮	8月	香椎宮のパワースポット	7
名島	9月	東洋一を誇る名島火力発電所	8
塩浜	10月	四社神社と和白塩	9
志賀島	11月	民の心・鎮魂の思い「蒙古塚」	10
箱崎	12月	関白秀吉箱崎二滞陣ス	11
香椎宮	26年2月	香椎宮の「扇塚」	12
名島	3月	名島妙見島の茶会	13
志賀島	5月	沖津宮燈籠堂と勝馬西福寺	14
三苦	6月	「三苦水道」と藤原純友	15
馬出	7月	町屋の風情伝える箱嶋家住宅	16
香椎	8月	二つの兜の形をした石が並ぶ「兜塚」	17
松崎	9月	旧唐津街道の蓮華坂・わくろ石	18
西戸崎	10月	海の中道遺跡	19
上和白	11月	「立花」(リウカ)と小金丸家	20
箱崎	12月	唐津街道と箱崎御茶屋	21
香椎宮	27年2月	万葉に詠まれた香椎の浜	22
名島	3月	名島発電所引き込み線通り	23

『さんぽ会』のホームページを公開しています。

URL : <http://www.e-sanpokai.tank.jp/>

あいさつ

東区長 日下部 修

東区歴史ガイドボランティア連絡会（愛称・さんぽ会）は、多くの歴史的資源に恵まれた東区で、市民の皆さんが東区の歴史に触れ、地域に愛着を持ってもらえるようにと平成21年4月に発足し、東区の魅力発信に大いに寄与していただいています。

また、同会から原稿や写真をご提供いただいている「歴史さんぽ・ボランティアのおすすめスポット」は、平成21年5月市政だより東区版にて連載をしてから、6年が経過いたしました。今回、その連載を取りまとめた「東区歴史街道を往く」を、平成23年3月の初刊から3冊目の「東区歴史街道を往く①②③」として作成いたしました。地域の歴史や文化に関する情報ガイドブックとして、ご活用いただければ幸いです。最後に、本書の発行にあたり、ご尽力いただきましたさんぽ会の古賀会長をはじめ、会員の皆様に厚くお礼申し上げます。

「さんぽ会」会長 古賀 偉郎

「月日は百代の過客にして行きこつ年もまた旅人なり」とは芭蕉の俳諧紀行『奥の細道』の一節ですが、私共も「歴史街道」を旅する旅人として、これまで六年の歲月、旅を続けてまいりました。その歲月は長いようでもあり、短い年月でありました。多くの歴史的資源に恵まれ、多くの区民の皆様の温かいご声援を受け、この旅を続ける事ができました。

「東区歴史街道を往く①②③」を、お手元にお届けできますこと、心より厚くお礼申し上げます。これからも、より新しい、より深いのある歴史的情報を発信し、新しく東区に來られた方にも、永くお住まいの方にも、我が町の素晴らしさと親しみを一層感じて頂き「楽しく・住みよい東区づくり」に微力ながらお手伝い出来ればと願うものです。

最後に本書の発行にあたり、ご尽力を賜りました日下部修東区長をはじめ、関係課、諸機関・団体の皆様に厚くお礼申し上げます。

歴史

歩・歩・歩
さんぽ

神と生きる島く志賀海神社（志賀島）

志賀海神社は、海の守護神、綿津見神をまつる全国の総本社で、古代より海をなりわいとする人々の信仰があつく、創建は古く967年にまとめられた延喜式神名帳にその名が記されています。



志賀海神社本殿

神は不浄を嫌うとされ、死と血を穢れとし神の目に触れないようにすることを神忌みといいます。志賀島の総鎮守である同社を中心として、島の人々の神忌みに興味深い面があります。

昔、氏子の神忌みの一種に肉親が死亡した場合、家族と別に火食する「別火」の風習があり、これを「セセーラ」といいました。屋外に「セセーラ小屋」を建て、父母死亡の場合、別火の75日のうち20日間この小屋で寝食し3年3カ月神社内に立ち入りませんでした。現在、別火はなく父母の場合13カ月神社内への立ち入りを遠

慮するなど血縁により細かく定められています。その他、棺は神社正面の参道を通ることができず、やむを得ぬときは白布で神社側を隠すといわれます。このような厳しい神忌みは、綿津見神への信仰のあつさ、深さの証であり、海をなりわいとしてきた島の歴史といえます。

【案内人】 古賀 偉郎



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

和臼・相ノ浦「神功皇后御繫船」(下和臼)

北部九州にたくさん残されている神功皇后じんこうこうごうの伝説の一つを紹介し
ます。

昔の和臼地区は、大部分が博多湾の遠浅の干潟で、博多への海上輸送の港として勝ヶ崎(現・和臼



「神功皇后御繫船遺跡」の碑

五丁目福岡朝鮮初級学校付近)を北へ回った所に「相ノ浦」がありました。

神功皇后は、出征の際、船で香椎の浦を離れると急に南風みなまが吹き出したため、海がしけることを予想しました。このため、博多湾を出ることを見合わせて相ノ浦へ船を入れ、しばらく舟遊びや魚釣りをして楽しんだといわれています。このとき船をつないだといわれる「船繫の松」と称する大きな老松が明治のころまであり、その場所に「神功皇后御繫船遺跡」碑が昭和16年に建立されました。その傍らには神功皇后にゆかり

があると伝えられる八角の井戸があり、少し道を登った所には香椎神社があります。

この神功皇后伝説から、人々はこの地を「南風ノ浦」と呼んでいました。これが訛なまって「相ノ浦」と呼ぶようになったといわれています。

【案内人】 門 靖夫



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

旧 福岡市動物園 (馬出)

馬出小学校に残る旧福岡市動物園のゾウの門柱が平成25年3月に市の登録文化財になりました。

福岡市における初めての市立動物園は、昭和8年8月に東公園に



馬出小学校に残るゾウの門柱

開園しました。昭和天皇の即位の記念事業として、市民の寄付によって造られたものです。動物園の正門には今回登録文化財になったゾウの門柱がありました。この門柱は、世界的に有名なドイツのハーゲンベック動物園の門を模して造られたといわれています。園内には、ゾウをはじめライオン、熊、オットセイなどの獣類65種、クジャクなどの鳥類124種と充実した施設でした。

昭和15年ごろまでは、観覧者の数も毎年増加し、1日平均1130人ほどの入園者がありました。しかし、太平洋戦争激化に

伴い観覧者は激減し、加えて飼料不足や空爆による獣舎の破壊を恐れて猛獣類を射殺することになり、ついに昭和19年5月に閉園となりました。

なお、当時オットセイの池の中にあつた朱塗りの六角堂は、現在大濠公園に浮見堂として移設されています。

【案内人】 山辺 信男



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

香椎宮のパワースポット (香椎宮)

1800年の歴史と伝統のある香椎宮にはパワースポットといわれる場所が数多くあります。

まずは不老長寿の霊力があると伝えられる「不老水」。5代の天



香椎宮の「不老水」

皇に仕えたといわれる武内宿禰たけのうちのすくねは、不老水を用いた食事を献上した皇の長寿に貢献しました。宿禰自身も300有余歳の長寿を得たといわれています。不老水は昭和60年に日本名水百選に選ばれましたが、湧出量が減ったため、香椎宮では少しでも多くの方が不老水を得られるようにと開門時間や取水量の制限に協力をお願いします。

次に、ご神木「綾杉」。神功皇后が親征から帰国後、三種の宝をこの地に埋めて「永遠とこに本朝を鎮護すべし」と祈念し、よりの肩の杉枝を挿したのが大木になった

といわれています。それから約1400年後、綾杉は香椎宮と共に島津の兵に焼かれましたが、新しい芽を吹き力強く生き続け、逆境に強く生きるパワーを放つていきます。

皆さんも心身のリフレッシュのために香椎宮を参拝してみませんか。

【案内人】 開田 正則



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

東洋一を誇る名島火力発電所（名島）

大正9（1920）年4月、電力需要の高まりにより、名島火力発電所が稼働を開始しました。その立地条件は、四つでした。一つ目は、燃料となる石炭の産出量が



名島火力発電所（昭和5年8月）

豊富な糟屋炭田や姪浜、西戸崎炭鉱が近くにあり、鉄道・船舶での輸送が便利なこと。二つ目は、ボイラーに利用する水には、多々良川からの水が豊富に供給できるところ。三つ目は、海岸に近く、冷却水に海水を使用できること。そして四つ目は、電力の消費地である福岡市に近いことです。

名島火力発電所は、最大出力1万kW2本の煙突で営業を開始しました。5年後の大正14年には、最大出力4万kW61基の煙突4本を備えた東洋一の火力発電所となりました。

しかし、昭和35（1960）年に老朽化により廃止されます。営業を開始して以来、41年の輝かしい足跡を残しました。象徴である4本の煙突も昭和37年に姿を消しました。

その跡地は県営名島運動公園となり、園内には当時をしのぶ記念碑が建っています。

【案内人】 池間 夏子



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

四社神社と和白塩 (塩浜)

四社神社は東区塩浜一丁目に鎮座し、由緒書きによると御祭神は、神功皇后、志賀三神、住吉三神、そして「塩」の神様である「塩土翁神」の4神です。



四社神社

四社神社がある塩浜の地は「昔、塩釜の浦、塩焼きの浜と称された」と同社の由緒書きに記され、三苦水道といわれる博多湾の奥の出入り口でした。

1500年頃には、個人による「塩」作りが行われていたと推測されています。その後、黒田藩は「塩は米に次ぐ産物である。塩なくして人は生きられない」と製塩に力を入れ、家臣の大野忠右衛門貞勝に命じて1703年には塩田を30町歩(約30畝)開き、塩浜地区を創立しました。

貞勝は、石を焼く、釜をたく煙が立ち登っていく様子を現在の西公園(中央区)から眺め、次のよ

うな歌を詠みました。

「みちのくも さながら近き塩か
まの けぶりにつづく海の中道」
神社前付近は「塩取りの浜」と呼ばれ、品質の秀れた「和白塩」を作る筑前屈指の産塩地となりました。しかし、その歴史も今から約百年前に幕を閉じたのです。

【案内人】 田中 澄人



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

民の心・鎮魂の思い「蒙古塚」(志賀島)

「蒙古塚」は志賀島西側の小字名「首切れ」という所にあります。日本征服を目指す元は、鎌倉時代に2度にわたり北部九州に侵攻し、そのうちの1274年の文永の役では2万8千人の将兵と



軍船将兵の碑「首切塚」

900隻の元軍が博多に押し寄せ、新兵器使用と集団戦法により街を焼き尽くしました。ところが、その夜の突然の暴風雨による軍船の退散時に志賀島に難破漂着した元の将兵200余人がこの地で処刑されたため「首(切)塚」と称する五輪塔や墓石などが地元の人の手により建てられたとされています。

その後長い間風雨にさらされ荒廃したため、昭和2年に中央区天神の勝立寺しょうりゅうじが中心となって日中友好平和をも祈念した供養塔が建立され、以来この塚を護持しています。かつては海上と後背地からの参詣

路でしたが、昭和42年の県道循環線開通により現在の階段に整備されました。また、平成17年の福岡県西方沖地震により供養塔が倒壊したため、2年後に現在地に改修復元されました。

86段の階段を登ると、今もそこに740年もの間漂う心霊の空気を感ずるようです。

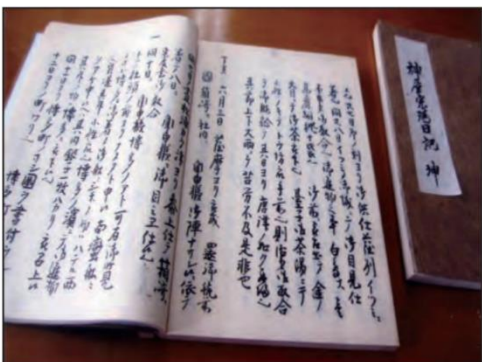
【案内人】 加藤 徳生



歴史
歩・歩・歩
さんぽ

関白秀吉箱崎二滞陣入
(箱崎)

北部九州に攻め上って来た島津軍を打ち払った秀吉は天正15(1587)年6月、箱崎に帰還、
宮崎宮に宿営しました。大坂に戻



宗湛茶湯日記 (西日本文化協会発行)

るまでの20日余り、ここで九州統治・天下統一の足固めのため、次の三つの事業を行いました。

- 九州の抑えとして小早川隆景(たかかげ)を筑前に置き、名島の築城を指示。
- 6月10日、キリスト教宣教師が仕立てたポルトガル船に乗り込み、戦火で焦土と化した博多を視察。一転して、6月19日には、キリスト教宣教師の退去と貿易の自由を宣告する文書「伴天連追放令」を發布。
- 6月11日には博多の町割・復興を黒田官兵衛に指示。

宿宮中は、たびたび茶会が開かれて歌も詠まれ、堺の茶人宗及や

利休らの茶や歌に対する熱心さ「数奇ぶり」は語り草となりました。また、宗湛ら博多豪商たちが手厚く遇されている点が注目されます。

以上のことは、秀吉の海外出兵構想の伏線だったのでしょうか。5年後、朝鮮半島を舞台にした文禄・慶長の役が始まります。

【案内人】 大和 右二



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

香椎宮の「扇塚」 (香椎宮)

ご神木綾杉の右奥に「扇塚」と彫られた石碑が立っています。扇子の供養塚です。なぜ、香椎宮に扇子の供養塚が…。

1712年の江戸時代、大坂の医者寺島良安が編集した百科事典ていまりよめんがあります。「和漢三才図会」と



香椎宮の扇塚

いって全105巻。その26巻目の一扇の項目に「神功皇后三韓征伐時見蝙蝠羽始作扇（じんぐうこうごうごうさんかんせいばつじこうもりのはねをみはじめておうぎをつくりたもう）」と記されています。神功皇后が朝鮮半島へ渡航中にコウモリの羽を見て、その形から扇を作って香椎に持ち帰ったという意味です。

福岡で活動している博多民踊協会が、踊りに使用して汚れたり壊れたりした扇子を何とか供養したいと思案していました。その際、前述の逸話から神功皇后の香椎宮と結びつき、昭和61年5月の建立に至ったのです。建立の心「ふる

さとを限りなく愛す」「ふるさとを振興す」「ふるさとを踊る」が記された扇が扇塚の下に納められています。地域の発展をも願う素晴らしい心が込められています。今や6月の「扇としようぶ祭」は香椎宮と地域の祭りとして定着しています。

【案内人】 内山 康夫



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

名島妙見島の茶会 (名島)

天正16(1588)年、博多湾に面した名島には、小早川隆景が築いた名島城があり、沖合には干潮時に徒歩で渡れる妙見島という

小島がありました。

隆景が名島城普請の陣頭指揮をしているところに、博多の豪商神屋宗湛や嶋井宗室などが普請見舞いに訪れ、酒肴を進上し、妙見島の海岸で酒盛りをしたと宗湛日記に記されています。隆景はたびたび茶会を開いていましたが、これは城造りや町づくりも博多の豪商たちの資金力を頼みとするため、親密さを図ったものと考えられます。秀吉の伝記『太閤さま軍記のうち』によると秀吉が朝鮮出兵のため名護屋城へ赴く際、側室の淀殿を伴い3日間名島城に滞在して、この島で茶会を催しました。その



太閤秀吉公茶遊井戸跡の碑



とき用いたといわれる井戸の遺構が今も名島一丁目のマンション敷地の片隅に存在し、太閤秀吉公茶遊井戸跡の碑が建っています。

昭和以降の埋め立てにより、妙見島の姿は面影すらありません。今も残る井戸だけがその折の様子を見つめていたのかもしれない。

【案内人】 加藤 祥子

歴史

歩・歩・歩
さんぽ

沖津宮燈籠堂と勝馬西福寺

(志賀島)



干潮時は志賀島(右端)と陸続きになる
沖津島にある沖津宮

面積約6平方キ、周囲約11キの志賀島には、禅宗の寺院が三つあり、いずれも博多承天寺の末寺で臨済宗東福寺派に属します。三寺の中では長寿山西福寺の創立が一

番新しく、『長寿山西福禅寺由来記』には次のように記されています。江戸時代の天和3(1683)年、博多承天寺の玉峰和尚が勝馬村の草庵に住んでいたところ、村には寺がありませんでした。当時は勝馬村民は、菩提寺としていた志賀莊嚴寺が遠くて不便なので、寺の建立を要望していました。そこで、郡代の吉田孫右衛門の計らいで、沖津島の沖津宮祠の北側の崖上にあつた燈籠堂に火をともし役目の報酬を玉峰和尚が譲り受けて住職となり、勝馬に寺が建立されました。その後、勝馬の全戸が檀家となり、浦奉行古田与八などの

配慮を受けて扶持米(報酬)が相続されたとのことです。燈籠堂は今はなく、石垣がわずかに当時をしのばせています。「筑前国続風土記附録」に天下の奇秀と賞された沖津宮は今、パワースポットとして若い女性たちの人気の的となっています。

【案内人】 古賀 偉郎



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

「三苦水道」と藤原純友（三苦）

昔、三苦と美和台との間に、新宮の湊みなとから和臼の塩浜を通り博多湾へ抜ける舟の通行可能な水路「三苦水道」があったといわれています（「ふる里のむかし わじろ」より）。

古文書「扶桑略記」によると



「三苦水道」があったとされる付近
(写真は県道湊塩浜線)

天慶4（941）年5月、現在の愛媛県に当たる伊予の掾じょう（律令制の第三等官）で、西海の大海賊の首領・藤原純友は、関東の平将門が平定されたという報に身の危険を感じ、千隻の舟と数千人の海賊を率い、大宰府政庁一帯を急襲。20日間にも及ぶ破壊、略奪、放火の限りを尽くしました。

各々が戦利品を抱え、博多津の船だまりに戻ると、そこは既に官軍に制圧され、大混乱の最中でした。800隻もの舟はだ捕され、海賊の多くは打ち取られ、その中には女、子どももいたということです。

純友と13歳の息子と側近たちは

官軍の動きを察知。数隻に分乗して夜陰に紛れ、警戒厳重な志賀島ルートを避けるため、官船の追撃を受けにくい、浅く狭く潮流が複雑でしかも近道である「三苦水道」を通り、本拠地伊予日振島ひぶりしまへ逃げ帰ったともいわれています。

【案内人】 吉川 清弘



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

町家の風情伝える箱嶋家住宅 (馬出)

国登録有形文化財の箱嶋家住宅は、明治5(1872)年、東区馬出・旧唐津街道に面したところに建てられました。住宅は貴重なかまどの神様「荒神様」があり、



箱嶋家住宅

欄干、箱階段、納戸に施されている深みのある色艶のべんから塗りなどは、見る人を楽しませてくれます。また厨子二階(中二階)、吹き抜けの天窓、水滴の音を楽しむ日本庭園の装飾がされた水琴窟(現在音は聞こえません)など、意匠に富んでおり、江戸末期の町屋の風情を今に伝えていきます。また柱と梁が一体化した構法は耐震構造としても優れ、平成17年に起きた福岡県西方沖地震にも持ちこたえました。築140年を超える現在も、いまだに木材から樹脂がにじみ出し、日本家屋の長い息吹を感じさせます。

荒神様は不浄を嫌い、それを犯

すと激しくたたる気性の荒い神様とされています。そこで、年末にお坊さまがお経と共に琵琶を弾いて鎮められました。60年近く途絶えていましたが、平成22年に復元し、毎年開催されています。

【お問い合わせ先】

箱嶋 090・5043・2107

【案内人】 箱嶋 文衛



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

二つの兜の形をした石が並ぶ「**兜塚**」
かぶと
(香椎)

「神功皇后西征の御時、此の地にて兜を着け給ひしと云う」(香椎廟宮記)

香椎廟宮記に記された神功皇后ゆかりの兜塚が旧唐津街道沿い、東区浜男の香椎宮飛地境内(現香



玄庵が持ち去った石(右)と
源四郎が納めた石(左)

椎駅前一丁目)にあります。

兜塚には、二つの兜の形をした石があり、その一つは約300年前の享保年間に、この塚から発掘され、博多の医師・萩野玄庵が持ち去り、庭石としました。玄庵の死後、石を墓石としたところ、たたりが多く困り果て、文化元(1804)年に香椎宮頓宮の海辺に運ばれました。

その後、昭和初期の海岸埋め立ての際、村人が元の場所に戻しました。

もう一つは、寛保年間(1740年ごろ)、新宮町上ノ府の農家・源四郎が、玄庵が石を持ち去った

ことを惜しみ、花崗岩を兜の形に似せて納めたといわれています。私が子ども時代の昭和20年ごろは、周囲はみんな田んぼで、兜塚は小高い鎮守の森でした。大きな石があちこちにあり、格好の遊び場でしたが「石に足を掛けるとたたりがあるぞ」という祖母のつぶやきは、子どもたちを静かにさせる特效薬でした。

【案内人】 橋口 千鶴子



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

旧唐津街道の蓮華坂、わくろ石れんげさか（松崎）

松崎中学校校辺り、旧唐津街道の坂道を蓮華坂といっています。昔、この付近は多々良浜の東端に位置し、ハスが茂り、近くの岩場の石がハスの花に似ていたとか、一面にレンゲ畑が広がっていたという言い伝えがあります。



蓮華坂近くにある「わくろ」に似た石（左）
とその説明が刻まれた石

福岡藩主が参勤交代で江戸へ向かうとき、福岡城から箱崎宿までは供揃ともぞろえの行列が続きました。千代・箱崎松原では、家老以下家臣の見送りを受け宮崎宮に参詣。箱崎お茶屋で旅装に着替えて出発し、多田羅（現多々良）大橋を渡り、蓮華坂を越えて、古賀の青柳宿へ入りました。

蓮華坂近くの公園に、「わくろ」によく似た大きな石が祭ってあります。「わくろ」とは方言で「ひきがえる」のこと。脇にある石には「立ち帰りの神・雨乞いの神 蓮華坂 わくろ石」と刻まれています。「わくろ」は水利・雨乞いの神として、さらに、旅から無事

に戻るという、立ち帰りの神として交通安全、疫病除けの神としても崇敬を集めました。

この辺りは、足利尊氏が多々良浜合戦中、援軍要請の書状を家来のよろいの片袖に包んで送り出し、勝利に導いたというゆかりの地で「片袖塚」や「將軍使い」ともいわれています。

【案内人】 平山 勲



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

海の中道遺跡

(西戸崎)

海の中道海浜公園の中にある「海の中道遺跡」は、昭和54年から平成2年にかけて4回の発掘調査が行われました。遺跡は、シオヤ鼻の東へ約500㍍地点から、玄界灘の海岸沿いに東へ約400㍍にも及んでいます。出土品の多くは、奈



製塩土器 (博物館)

土錘(上)と(下)釣り針(西戸崎小学校)

良・平安時代のものです。

魚網用の錘、釣り針や、製塩土器、製塩用の炉などが見つかり住民のなりわいが漁業や製塩だったことが推測されます。このほか、越州窯青磁器、青銅製のかんざし、皇朝十二銭など、漁村には珍しい遺物も出土しています。このことから、ここは大宰府政庁役人の食事や、鴻臚館で大陸からの使者をもてなす料理に使う海産物の調達・加工・保存を行う「津厨(つのみくりや)跡」ではないかともいわれています。

万葉集に「藻塩焼く」と歌われていますが、ここで出土した製塩土器を使い、海藻を焼いた灰を海

水に溶かしてつくる古代製塩法が行われていたようです。

遺跡は埋め戻され、現在、見ることはできませんが、出土品は市埋蔵文化財センター(博多区井相田二丁目)に所蔵されています。その一部は西戸崎小学校(西戸崎六丁目)と市博物館(早良区西道浜三丁目)に展示されています。

【案内人】 石井 志津子



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

「立花」(リュウゲ)と小金丸家 (上和白)

上和白地区に立花と書いて「リュウゲ」と読む地域があります。小金丸種尚資料「当用万宝集」に「立花と申す所に、古き大塚有り、其脇に、五重の塔有り。何某が墓と云事知らず候」とあります。



小金丸家の地蔵堂

天正9 (1581) 年たちばなに立花道雪公は、毛利勢との戦いに備え、ここに出城を構えました。敵に陣を大きく見せるため、大石を持ち寄り築き上げた陣屋の用水を立花リュウゲの井戸といたしました。

大正14 (1925) 年ごろまでの立花地区は、五輪の塔もあり、古墓20数基が並んでいました。

昭和初年には立花の井戸のみが残っていましたが、農地整備の際、この台地を切り崩し、五輪の塔は明覚寺へ奉納・移転されました。跡地には、上和白公民館 (現和白東一・二丁目公民館) が立っています。

天正16 (1588) 年、城主の立花宗茂公が柳川に国替えされると、家臣の小金丸虎政は請うて和白の地に下野しました。

この周辺は小金丸一族が多く、庭先に地蔵堂や弥勒菩薩を祭る家もあり、現在でも大きな納屋付きの屋敷が集落をなしています。

【案内人】 柳瀬 英昭



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

唐津街道と箱崎御茶屋 (箱崎)

宮崎宮の「一の鳥居」(国の重要文化財)の前を通る道が、かつての唐津街道です。この街道は、福岡藩の他、唐津藩、平戸藩、大村藩、対馬藩などの参勤交代の道で、長崎街道に次ぐ街道でした。

街道には、一定間隔で宿場があ



左側の道は旧唐津街道に至る

り、福岡藩では、宿場の出入り口に構口かまぐちというものを設けていました。箱崎宿は、一の鳥居の少し北側の西構口と現在の福岡宮松郵便局あたりの東構口で仕切られた一帯でした。

唐津街道から浜側に入ったところに福岡藩の別邸で、参勤交代で諸大名などが宿泊した箱崎御茶屋がありました。この御茶屋は、建物は200坪と大きく、表門や番所、いむら既の他、主屋には幾つもの広い座敷ざしきがありました。

箱崎御茶屋では、歴史的な出来事があります。安政5(1858)年、勝海舟が船長の咸臨丸とオランダ海軍カッテン

ディーケが船長のエド号が博多湾に入港。その際、藩主黒田長ながり清は、一行を御茶屋に招き、歩兵訓練を見せ、酒肴しゅげんを出して歓待しました。また、慶応2(1866)年には、長崎のトーマスグラバーを御茶屋に迎え、客間を美しく飾り、寺から僧侶の椅子を借りて、洋食でもてなしました。

【案内人】 山辺 信男



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

万葉に詠まれた香椎の浜 (香椎・頓宮)

香椎宮参道の大鳥居近くの坂を登ると市内で最も古く、明治21年建立の「香椎瀉万葉歌碑」があります。歌碑は、当時の内大臣三条実美の揮毫(毛筆の文字)を総理



香椎宮頓宮の万葉歌碑

万葉仮名で「去来兒等香椎乃瀉爾白妙之袖左倍沾而朝菜採手六」と旅人の歌と他2首が刻まれています

大臣広田弘毅の父親で石工の広田徳右衛門が刻んだものです。

神亀5(728)年11月、大

宰府の長官・大伴旅人が次官・

小野老、豊前守・宇努首男人ら

を従えて香椎廟宮に参詣。その帰途、

馬を香椎の浦にとどめて、各人が

詠んだ3首の歌が万葉仮名で歌碑

に刻まれています。

大伴旅人は「いざ子ども香椎の

瀉に白妙の袖さえぬれて朝菜摘み

てむ」と詠み、その解釈は「さあ

皆の者、この香椎の干瀉で袖の濡

れるのも忘れて朝餉の海藻を取

うではないか」とされています。

小野老は「時つ風吹くべくなり

ぬ香椎瀉潮干の浦に玉藻刈てな、

宇努首男人は「行き還り常にわが
見し香椎瀉明日ゆ後には見む縁も
無し」と、共に香椎瀉について詠
んでいます。

大伴旅人は生粋の名門貴族出身
で武將にして歌人。「天離る鄙(都
の外の地)」に60歳を過ぎて赴任
した旅人の心を癒やした香椎瀉で
あったことでしょう。

【案内人】 森 房乃



歴史

歩・歩・歩
さんぽ

名島発電所引き込み線通り (名島)

大正9(1920)年、東洋一を誇った名島火力発電所が稼働を開始しました。燃料の石炭は、団平船で回漕されるものと、西鉄名島駅付近で分岐した引き込み線



写真右端から発電所に至る引き込み線
(昭和31年当時の写真)

により石炭専用貨車で搬入されるものがありました。引き込み線は、国道3号線から名島商店街のメイストリートを通り、発電所へ単線で敷設されていました。

当時の面影はありませんが、西鉄名島駅から微妙に続くカーブの道に鉄道線路を感じます。商店街の道筋の壁には、当時の写真入りで「愛称パネル(標識)」が設置されています。『故郷名島の歴史』には「弁慶号に似た汽車が、汽笛を鳴らし石炭貨車を引っ張っていた」と当時の様子が記されています。石炭は、国鉄(現JR)吉塚駅から市電に乗り入れ輸送されましたが、市内電車はレール幅が



広い広軌、国鉄は標準軌道とレール幅が異なるため、広軌のレールの内側に1本のレールが敷設され、共用されていました。市電に乗り入れ後、石炭は、市電三角駅を発し、市電博多船だまり線・新博多駅から西鉄宮地岳線(現貝塚線)へ乗り入れ、引き込み線を通り、発電所に輸送されていました。

【案内人】 安部 光征



ガイド風景（香椎宮・不老水）

東区歴史街道を往く Vol. 3

- 発行 福岡市東区役所 Vol.3 平成27年3月
- 編集 東区歴史ガイドボランティア連絡会
愛称『歩・歩・歩（さんぽ）会』

『歩・歩・歩（さんぽ）会』の愛称について

「新しい人たちと歩み、地域の人たちと共に歩み、ボランティアとしてのヨチヨチ歩きを始める私たち、この三つの歩みを積み重ねていきたい」との思いから、また、地域の歴史を楽しく散歩する意味から、三歩と散歩で「さんぽ会」と命名されたものです。

『さんぽ会』のホームページを公開しています。

URL : <http://www.e-sanpokai.tank.jp/>